

## 大阪発展のシンボル

# 御堂筋

### 大大阪の未来を託して

休日の夕方、難波から北に向かって御堂筋を歩く。広々とした歩道は最高の散歩道だ。ブランド店のウインドー、大丸、そごう、ガスビル、南と北の



御堂筋には30体近くの彫刻がある

御堂さん、日銀……風格ある建物と彫刻の女性たち、夕間に影を落とすイチョウの木。どこにもない大阪の風景がここにある。

大正3年に大阪市助役に就任した關一氏は、日本を代表する都市施策学者でもあった。当時の大阪は、明治40年の市域拡張により明治以前の整然としていた町並みが崩れつつあった。關氏はその原因を法の不整備にあると考え、国の都市化計画法の起草に尽力した。その先にあるのは一流の都市としての大阪の姿と御堂筋構想だった。



拡張前の御堂筋(淀屋橋南詰)  
写真提供/ (財)大阪市都市工学情報センター

が並び、人々が生活している。そこを一挙に全長約4キロ、幅員24間(43.6m)に拡張し、地下には市営高速軌道を走らせる。電線を

それまでの御堂筋とは、北御堂と南御堂を結ぶ南北の道のこと。淀屋橋南詰以南は淀屋橋筋と呼び、いずれも幅6mほどの細い道だった。道の両側には家



現在の御堂筋

地中に埋設し、並木や橋梁、街灯を整備し、沿道の建築物については高さ100尺(31m)制限……關氏の理想とした住み心地のよいまちとは機能と美しさを備えた都市だった。

3300万円を超える総工費の3分の1は市民に負担せよと宣言する。世にいう受益者負担の思想を実行したのは御堂筋が最初とされる。大阪はそれこそヤッサモッサの大騒動だったにちがいないが、大正15年、前人未到の大工事は始まった。その前年、大阪市は第2次市域拡張を行う。東京市を抜く大都市「大大阪」の誕生である。

### 子どものために地下道を設置

拡張計画を聞いた市民は「關市長は飛行場でも作るつもりか」と嘆いたのは有名な話だが、御堂筋を渡る人、とくに通学の子どもの心配をする声が高かった。その打開策として造られたのが順慶町、八幡筋(御津)、難波新地の3カ所の地下通路である。工費の一部は地元の篤志家の寄付に頼った。小さい子どものために階段の高さも低く造られていたそうだ。難波新地のそれは現在の地下鉄難波駅11番出口になっている。

昭和12年、御堂筋は完成した。まさしく飛行場のように広い御堂筋は夜になると周辺のやんちゃ坊主たちのローラースケート場になったという。大阪にたくさんの子どもの時代だった。

### 存亡の危機を乗り越えたイチョウ

金色の小さき鳥のかたちしていちょう散るなり夕日の丘に…与謝野晶子の歌の如く、夏には緑陰を広げ、秋になると黄葉して通行する人の心を優しく包む御堂筋のイチョウ。イチョウは公孫樹と書く。公孫とは王侯の孫のこと、つまり、ぎんなんは老木となったものに実るからだ。樹種の実現については大議論があったという。

昭和10年頃にこのイチョウに存亡の危機がせまった。防空壕の材木用という名目で軍から伐採命令が出されたのだ。大阪市は了解せず、そのうちに20年3月21日の大阪大空襲、そして終戦。船場一帯を焼け尽くした大空襲の日、人は御堂筋に出て命拾い、イチョウも生き残った。

現在、幹の太さが2メートル以上の樹齢90年の木も健在だが、この20数年で400本以上の樹木が植え替えられている。御堂筋沿いは夏場、周辺の道路よりも1~2度、気温が低くなるのはイチョウ並木の恩恵だという。

御堂筋は昨年、70周年を迎えた。95年には建物の高さ制限が緩和され、現在、数カ所でビル工事が進行中だ。御堂筋パレードや御堂筋kappoの舞台として、大植英次氏が指揮棒を振る大フィルのステージとして、それぞれのイベントを盛り上げる御堂筋。先人たちが残してくれた大阪の大きい遺産。古びることなく人々の心を豊かにしてくれる美しき御堂筋よ、永遠に。